



# 新しく建立された 「李参平碑」



7月25日に陶山神社後背地に「陶祖李参平碑」の除幕式が韓国の金榮吉福岡総領事、古川佐賀県知事ほか多数ご出席のもと行われました。

すでに大正6年建立の李参平碑があるのに何故かと疑問をだく方がいると思います。時代の流れ等もあり「李参平公顕彰委員会」(会長・山口隆敏氏)で検討を重ねられ除幕式に至った次第です。当館で知り得た情報の範囲でその経緯を紹介します。

まづ大正6年李参平300年祭を記念して建立された碑文には「我ガ陶祖李参平ハ朝鮮忠清道・金江ノ人ナリ文禄元年豊公征韓ノ役ニ方リ、我ガ軍ノ為ニ尽瘁スル所、甚ダ少カラシカハ慶長元年藩祖直茂公凱旋ノ際、携ヘテ帰化セシメ多久安順ニ属セシム」とあります。

このことを韓国の徐賢燮氏執筆の『日韓曇のち晴』2005年5月刊一によれば「これは征韓戦争の際に豊臣秀吉軍に協力した功績により李参平を日本に來させてやり帰化させてあげたという意味だ」と、そして有田の人々が李参平の遺業を讃える碑を建てたのは大変有難いことであり、韓日友好関係を増進させるものとして評価されるべきである。撰文の全体的内容からは有田の人々の李参平への感謝の気持ちが感じられる。

そして上述の大正6年碑文のアンダラインの部分韓国人に言わせれば碑文としては、どうしても適切でないようである。有田の李参平頌徳碑は韓国から見れば、その碑を建てた有田の人々の純粋な感謝の念を退色させてしまうし、両国の草の根交流にとっても望ましくないだろうと。

話は変わって1990年(平成2)10月に有田町と韓国陶磁器文化協会が協力して鷓鴣山国定公園に建立された碑文は「李参平は文禄慶長の役に際して来日され1616年九州・有田泉山で磁石を発見、日本最初の白磁焼成に成功した」(以下略)と。

その後、2000年(平成12)11月12日付の佐賀新聞記事を見ると、広州市から40キロ離れた天安市の独立記念館近くに、市民団体により李参平の訂正碑を建てていることが判った。その内容は「李参平陶工碑文訂正推進委員会」(李豊鎔委員長)により「弘益明鏡碑」と「李参平公解冤碑」の二つを並べ「李参平が豊臣軍の道案内をつとめ、自発的に日本に渡った」との表記になっている有田と鷓鴣山の碑文を否定「捕らえられて渡った。祖国と民族への背信はしていない」と強調している。この韓国での除幕式が10月末に行われているが、有田町には何の説明もなく、当時の篠原町長、蒲地商工会議所会頭もコメントは控えたいと発言されたことを佐

賀新聞で紹介しています。

一方、この天安市の除幕式に出席された在日大韓国民団佐賀県地方本部の崔吉男団長は、同委員会の心情は理解しつつ戸惑いも見せ、「碑文問題の真の解決には有田に韓日友好の新たな記念碑を建てるのが望ましい。町とじっくり話し合う機会を持ちたいと話す」このように新聞記事は続いています。

今回の新しい「陶祖・李参平碑」によって、両国で理解できる碑文となった次第です。

今年の日韓友情40周年で、一つの節目です。この節目に一応解決したことは喜ばしいことです。

李参平が日韓交流のシンボルとして、李参平碑を訪れる人々に感動されるものと、願っています。

## 今回建立された「陶祖李参平碑」の全文

有田焼の祖である李参平は朝鮮国(現在の大韓民国)忠清道金江の出身といわれ、1592年に豊臣秀吉が朝鮮へ出兵した時、鍋島軍に捕えられ道案内などの協力を命じられたものと推定される。

李参平公は、佐賀藩祖鍋島直茂公が帰国の際、日本に連れて来られた。後に帰化し、出身地に因んでその姓を金ヶ江と名乗った。

初めは、参謀の多久安順に預けられ、小城郡多久村に住み、手慣れた焼き物の窯を起していたが、良い土に恵まれず、領内各地を探し歩いたという。

1616年ごろ、松浦郡有田郷三代橋に来て窯を築き、ついに泉山で最良の原料となる磁石を発見すると、上白川に移り住んで、純白の磁器を造りだした。

これによって、日本で初めて磁器が焼成されたと伝えられる。

その後、この製造技術は、多くの陶工によって綿々と引き継がれ、有田焼の今日の繁栄に至ったことは周知のことであり、李参平公は、有田の陶祖であるだけでなく、日本の窯業界の大恩人である。

今なお陶磁器関連の諸事業に携っている人々は、この先人の残した恩恵に感謝し、心からその功績を敬慕している。

ここに「2005年日韓友情年」を記念して、日韓両国民の真の理解と友好親善が更に発展すると共に、このすばらしい交流の歴史が末長く、後世に伝えられることを願う。

2005年7月吉日

李参平公顕彰委員会

以上

(久富 桃太郎)

季刊

# 皿 山

2005

# 秋

No.67

有田町歴史民俗資料館・館報



# 平成の皿山職人像

## 金継ぎ職人・秀敏信さん

シリーズで紹介している職人さんですが、第六回は製品として使用する中で、破損したものを修復するという今までとはちょっと違った職人、山内町在住の金継ぎ職人・秀敏信さん(53歳)を紹介します。



割れたり欠けたりした焼き物を修復する職人を「金継ぎ」あるいは「金つくろい」といいます。県内でもこの仕事を専門とする職人は秀さんがおそらく唯一の方ではないかと思いますが、もともとは父の故年元さんの時に始めた仕事でした。年元さんは終戦後、同じく焼き物の産地であった常滑に引き上げてきました。そこで、漆関係の仕事をしていた時に修復の技を覚えたといいます。

### 【父から子へ】

その後、年元さんは有田に帰り古美術商を営む傍ら、40年ほど前から金継ぎの仕事を始めました。このような仕事はいつ頃からあったのでしょうか。

江戸時代の風俗についての考証的随筆『守貞謾稿』に「瀬戸物焼接」という職業が紹介されています。これは割れた焼き物を修復する人で、両肩に渡した天秤棒の先に大きな道具入れを下げています。以前は漆で修復し、寛政頃から白玉粉を使っていたことも記されています。昔の日本人はものを大切にしましたから、焼き物が割れたり欠けたりしても、すぐに捨てたりせず修理して使っていました。そこにはいわばリサイクル業者「焼き継ぎ職人」の腕が必要でした。

敏信さんが父の跡を継いでこの仕事を始めて32年程になります。依頼主の大事な焼き物を預かり、修復す

るのに時間もかかりますし、その間かけがえのない品を保管するのですから、看板を出して仕事をするわけにもいかず、宣伝もしなかったのですが、次第に口伝えて仕事の依頼が広がっていきました。

### 【修復方法】

材料は有田町内の窯材業者から購入する焼き物用の樹脂、金、銀など。使う道具は研磨機、小刀、筆、ハケなどです。修復は大きく二つの方法があり、一つは金継ぎ修理という欠けた部分をつなぐやり方で、もう一つは共修理といって樹脂で下地を作り色あげ(焼き物の地肌の色に合わせる)する方法です。前者は実用に適し、後者は鑑賞用に適しています。

作業工程は次のとおりです。

- ① 割れたり欠けたりした部分を埋め込んで下地を作る。
- ② 下地が乾燥したら、他の部分との凹凸がないように研磨機で削って同じ面にする。
- ③ 金、銀、いぶし銀などを使って筆で化粧を施して完成。

割れ方や割れた部分の多少によって修復にかかる時間も手間賃も変わりますが、平均すると一つの製品にかかりきりで4～5日の時間を要します。また、費用は欠けた部分の広さが小指の爪位で平均して1500円から2000円ほどになり、それに彫刻を入れたり、大きく欠けてしまって部品がなくなっている場合(例えば徳利の口の部分がなくなっているなど)は割高になるそうです。

### 【最近の傾向】

以前は古美術商やコレクターの依頼が多かったようですが、最近は個人でもその家に代々伝わる愛着のある品が欠けてしまったとか、ちょっと昔の割烹食器で揃いの食器の一つが欠けてしまって、セットで使えなくなったというので持ち込まれるケースも多くなってきたといいます。

焼き物を作り出す仕事とは異なり、地味ではありますが一度はその命が絶たれたものを甦らせるという、いわば「焼き物のお医者さん」のような「金継ぎ職人」ですが、秀さんはこの仕事を通しての面白さを「割れや欠けは一つひとつ違う、同じ仕事は二度とないところがいい」といいます。その反面、前例のない作業でもあり出来得る限り忠実に元の状態に戻すことを要求される難しさもあります。

皆さんの家庭にも捨てるには惜しいが、「このキズが」という焼き物が眠っていませんか。そういうものも生まれ変わるチャンスがあることを、「金継ぎ職人」の腕が教えてくれます。





「フルベッキとその塾生たち」前列左から3人め、刀を手にしているのが江副廉蔵、その後方が大隈重信

## ◆明治の志士・江副廉蔵

幕末から明治維新へと大変革が行われた時代があったことはよく知られた史実ですが、その変革を担った人々の中に、有田にも大変馴染みのある人がいたことはあまり知られていません。

それらの志士達が写った写真(上)もまた、よく見かけますし、最近は陶板となって出回っているようです。これは明治2年(1867)、日本人として最初のカメラマンであった上野彦馬によって長崎に於いて撮影されています。

しかし、時間の経過と共に、被写体の人物についてさまざまな推測が出回り、写真だけが一人歩きしている感があります。先日、神埼郡千代田町在住の歴史研究家・末岡暁美さんが来館され、この写真とそこに写っているある人物について次のような話を伺いました。

それは写真中央がフルベッキ親子で、前列左から三人目が佐賀藩士・江副廉蔵、その後方が江副の姉婿であった大隈重信であること、後に江副の次男隆一はフルベッキの長男・ウィリアムが校長を務めていたアメリカのマニリュース士官学校に留学し、そこで入手したこの写真を東京在住の江副家の子孫が保存されていたことなど、大変興味深い話でした。

※フルベッキについては館報『季刊血山 No.42』の「血山の群像～幕末の有田を支えた人々」を参照ください。

江副廉蔵は嘉永元年、佐賀鬼丸に生まれ、慶応元年長崎に出て致遠館に学んでいます。その折にフルベッキの教えを受けたものと思われていますが、有田の歴史の中にもたびたび登場します。『肥前陶磁史考』によれば、明治2年密かに上海へ脱走して三松洋行という会社で働き、シンガポールで行われた博覧会へ有田焼を出品し、大いに美術工芸品としての有田焼の名声を挙げたことが記されています。明治2年といえば、この撮影が終わった後に出航したのでしょうか。

その後、明治9年のアメリカ・フィラデルフィア万国博覧会に、有田から参加した深海墨之助や手塚亀之助などの通訳として同行しています。時に廉蔵28歳。当館所蔵の同年7月8日付け、八代深川栄左衛門がアメリカの同志に宛てた手紙には「江副君には苦勞をかけている」などと感謝の気持ちを伝える内容が記されています。

帰国後は煙草販売業を始め、米国製煙草の直輸入や満州・朝鮮における煙草販売法の基を作ったりして一代で財を成しました。その後、社会公共事業などにも貢献しましたが、大正9年に病没しました。享年72。東京・青山霊園にある墓碑には、江副廉蔵の一生が刻まれています。なお、江副廉蔵に関しては末岡さんのホームページがあります。

(<http://blog.livedoor.jp/bakumatusaga/>)



## 夏休みの資料館

小学生を対象に、夏休み期間中の恒例行事となった町屋の模型作り教室を8月18日、19日の二日間にわたり開催しました。

有田町内山地区には江戸時代から昭和にかけて建てられた古い町屋が残っているということで、国の伝統的建造物群保存地区に選定され、毎年数件ずつの町屋の補修事業が行われています。

そこで、未来の有田を背負っていく子供たちに町屋の模型を作ることにより、伝統ある有田の建物を再認識してもらい、大切にしてほしいということで小学校5、6年生を対象に開催し、今回で5回目となります。



町並み担当者から、説明を受ける子供たち

今年是有田小学校から佐々木司くん、末広貴幸くん、本島沙希さん、馬場麻衣さん、有田中部小学校から中原千波さん、岡本百華さん、中島浩太くん、太田伸くん、中山宏志くんの計9名が参加しました。

カッターを使うため、目が届く範囲の参加者しか受け入れできないのが悩みですが、回を重ねることに子供たちの発想の豊かさに驚かされます。

最初は悪戦苦闘の子供たちでしたが、徐々に手際よく作業が進み、時間内に数軒の模型が完成しました。今回は町屋のほかに樹木やトンバイ塀など、いろんなアイデアを使って町並みを再現。また来年も引続き開催する予定ですので、5、6年生の皆さんはぜひ参加してみてください。



家の周囲にトンバイ塀を作っています



## 江戸期、有田焼への税金

泉山で採石をし、有田焼が出来上がるまでに色々の運上銀(税金)がかけられています。それが現在に直すと、どうなるのか日本銀行佐賀事務所を通じ日銀本店情報サービス局におたずねしました。

江戸時代には金貨・銀貨・銅貨の3種類があります。金貨は小判1枚で1両、銀貨は重さがそのままの価値で「秤量貨幣」と言っていました。銅貨(銭)は1枚が1文という「計数貨幣」です。

元禄13年(1700)から天保13年(1842)までの幕府の公定レートは、金1両=銀60匁=銅貨4000文でした。その当時、米や労賃1両は現在の価格に直すと、おおよそ5万円です。

これを基に江戸時代鍋島藩の運上銀と有田皿山からいくら納めていたかを計算してみました。

そうしますと鍋島藩の運上銀は7600万円の有田皿山からその60%を納税していましたから4600万円ということになります。

更に物価が、どのように変わってきたかを調べました。日銀調査統計局によれば、企業物価指数は昭和9~11年を「1」として、明治34年(1901)が0.469、平成16年(2004)が644.7です。即ちこの100年間で1375倍になっています。また総務省統計局の指数を見ますと昭和22年を100として平成12年は1776.7となっており、戦後60年間の物価が17倍となっています。最近の物価指数の動きを見ますと平成9~10年が一番高く、それ以降物価はやや下降気味です。

そうそう江戸時代、泉山の採石場から唐臼小屋まで運搬する人ならびに細工人・絵画する人・底取りする人に毎月7分(583円)の税金が、赤絵町には「赤絵箔請」といって銀1貫410匁(11万7千円)もの税金がかかっています。

(久富桃太郎)

## 季刊『皿山』

通巻67号(平成17年9月1日)  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185